

### ナベヅルやっと7羽渡来 ツルのように首を長くして2陣を待つ

**去**る10月31日 早朝6時26分ねぐらから餌場へ到着した成鳥2羽を確認しました。昨年度より8日遅い渡来でした。片足下げて飛び姿から、昨年度渡来し、片足を痛めた1羽がいたC家族であることが分かりました。残念なことに今年度は幼鳥がいないうがいでだけの夫婦でした。

それから、第2陣を待ちました。10日にもなると、あまりにも遅いので、もしや病気や事故に遭ったのではと不安が過ぎりました。第1陣の渡来から2週間遅れて11月14日6時33分に待望の第2陣の5羽が渡来し、やっと昨年と同じ7羽になりました。

2陣の5羽は成鳥2羽の夫婦と子どもの幼鳥2羽の1家族に成鳥1羽の構成でした。しかし、渡来直後から先着の2羽が、執拗になわばり意識を丸出しにし追いはらっています。早く両方が八代に馴れて仲良く生活して欲しいです。

これから本格的な冬が到来するので、もっと増えるのではないかと期待しています。



周南市ツル保護研究員 河村 宜樹

※第2陣5羽のツルは、残念ながら11月18日に飛去しました。(編集部)

6・6・9・6・6・6・9・6・6・9・6・6・6・9・6・6・9・6・6・9・6・6・9

### 漫画家 なかはらかせさん **から** 八代へのメッセージ! **No.10**



今年も八代にツルたちがもどってきた。春と秋に徳山大学との連携で若者たちが農業体験をした。夏に学生たちがスケッチ研修にやって来た。ボクも学生たちに混じってグラウンドから今年もツルが来ますようにと祈りながら八代小学校をスケッチした。

最初の二羽が飛来した時、その報告に「やった!ばんざい」と思わず両手を挙げて叫んだのはボクでも八代の人たちでもなく、実はお世話になった徳山大学の先生たちだった。

ツルたちが少しずつ人の輪をひろげてくれている。

# ツル放鳥特集



## 4羽の保護ツルは

# 今

25号以降の保護ツルの様子について、紹介していきたいと思えます。

今年の夏は、例年に比べ気温が高かったようで、ツルの飼育にも何らかの影響があるのではないかと心配していましたが、そんな心配は4羽の行動を見ていたら吹き飛んでしまいました。毎日18時ぐらいから始まるダンスと飛行や元気に昆虫を追いかける姿、地面を掘って出てきたミミズを少し驚きながらも丸呑みする姿などは、夏バテを感じさせない元気な様子は関係者をほっとさせてくれました。

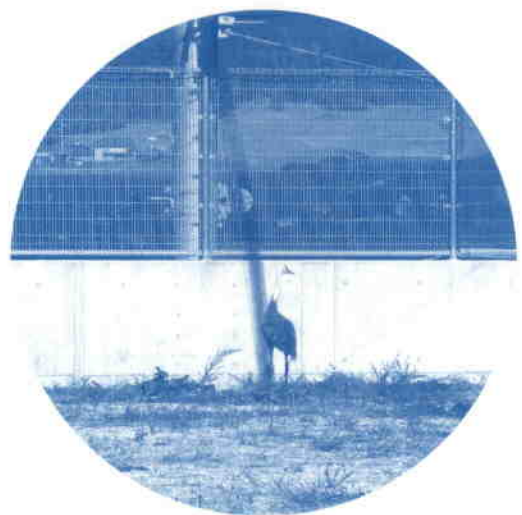
そんなツルたちも、元々は8月の平均気温が約20℃の地域で生活する鳥、よしずで作った日陰の下で佇む様子や、時折みせる池でのダイナミックな水浴び、スプリンクラーの下で30分以上も水浴びする姿をみると、やっぱり暑かったのかと思います。

約8ヶ月間飼育されてきた保護ツルも、11月下旬には放鳥され自然に帰って行きます。今年は、3羽のツルに大きな羽根の欠損が確認され、改善が見られなかったため、オスの1羽のみの放鳥となります。残りの3羽については、もう1年継続して飼育を行い、羽根の生え変わりを観察していきたいと思えます。

1日でも早く、全てのツルが自然に帰れるように今後も飼育していくとともに、今回放鳥する1羽には、元気に空を舞ってくれること、そして来年の冬にはまた八代へ飛来してくれることを期待しています。



継続飼育することになった3羽のツル



放鳥されるオスのツル

周南市教育委員会 生涯学習課  
鶴担当 増山 雄士

## 鹿児島県出水市と周南市が友好都市関係を提携

2008年11月10日、鹿児島県出水市と友好都市提携の調印式に立ち会うことになった。前日の9日午前10時に周南市役所を出発、距離にして420kmくらいあり、6～7時間程度かかる、私自身通いなれた道でもある。今回の訪問で22回目を数える。

鶴担当になって5年目になるが、ツルの移送に奔走した日々を思い出す。最初は、ほとんどが日帰り状態で、山陽新幹線博多からリレーつばめに乗り換え、新八代まで行き、さらに新幹線つばめ号に乗り換えて、2つ目の駅である。だいたい4時間程度かかる。

保護ツル移送には、最初移送箱を運ぶために、前日にワゴン車で出水市へ入る。運送会社との打合せや出水市の協力で移送箱の消毒や打合せをし、準備する。翌朝は、いよいよ捕獲するわけだが、出水市の監視員、職員等の協力でスムーズに運ぶ。いつもながらその手際の良さには感心する。捕獲後は周南市の獣医師等や地元の獣医師、場合により鹿児島大学の獣医師の協力で血液採取、身体検査等を実施する。その上で異常がないことを確認し、いよいよ移送箱へ入れる。狭い移送箱の中にツルを入れ、八代までの440kmを6時間半かけて移送する。

毎回出水市のツル保護センターの前で出発式がある。地元の関係者や中学校の子どもたちがツルを見送る。そんな中、「お預かりします」との思いで大切なナベヅルをトラックで移送する。いままで3回ツルを移送した。2月、5月、4月の3回である。季節によりトラック輸送も気を使う、室温を20度程度に保ちながら時折換気しながら、様子を見ながら移送する。緊張する数時間である。

そんなやりとりをここ5年間出水市と繰り返しやってきた。小学校との交流、監視員さんや出水市の農家の方、野鳥の会の方、出水市のさまざまな交流の中でツルの移送は実現していると思う。すでに交流は進んでいるが、今回は正式に出水市と周南市が友好都市関係を提携した。出水市の渋谷市長さんが18年8月に周南市に来られ、友好都市盟約の要請があり、それから2年、周南市も河村市長から島津市長に交替し、その要請は実った。

会場で両市長が書類にサインし、固く握手し、その日はやってきた。会場を見渡すと顔見知りの方も多くおられ、両市の提携に花を添えておられた。

やはり、ツルを縁とする提携になるのだろうか、片や万羽ツル、片や絶滅寸前という対照的な状況ではあるが、この人との縁が、ツルへ伝わり、移送しなくともツルが察知して「そうか、薩長連合が実現したか、ではわれわれも少し仲間を送り込んでやるか」などとどこかの田んぼでツル同士の会合が開かれているかもしれない。と夢のような妄想が脳裏を巡る。

地元八代では、「ツルと人・共生の里」再生構想を作成し、子ども100人、ツル100羽を合言葉にツルが住み易いふるさとづくりの取り組みが始まっている。農地を守ること、それがツルを守ることとも言える。江戸、明治、大正、昭和そして平成と守りつづけてきた先代の思いを次世代に引き継がなければならない。



日本の中でナベヅルの越冬地は、出水市と周南市しかないのである。異論もあろう、今では四国、大分、鳥取、和歌山など日本のあちこちにナベヅルが出没して話題になっている。しかしながら、老舗越冬地の八代からツルを無くすわけにはいかない。

この友好都市関係が、ツルのいる町としていつまでも友好関係が続くことを祈らずにはおれない。

周南市教育委員会 生涯学習課  
鶴担当主幹 徳永 豊